
というアニメ

にえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

というアニメ

【Nコード】

N4016U

【作者名】

にえる

【あらすじ】

なんとなくだが過去の俺は原作知識とやらが無くとも大丈夫だと確信していたらしい。

今の俺に言わせてもらえば相当困った野郎だ。

どうしようもない困ったちゃんだ。

だって、どんな物語かすら今の俺にはわからないからだ。

戦闘系なのか、日常系なのか。

興味本位で混ぜっても大丈夫なのか、危険なのか。

とりあえず主人公を探すところから始めようかと。

そしたら方向性が見える、はず。

前編（前書き）

前編と後編のみとなっています

前編

俺が住んでいるのは海鳴という市なのだが、どうやらここには主人公がいるらしい。

らしいというのは俺自身にはそういった記憶が無いからだ。というか気付いたらこの世界にいた。

デフォ能力が主人公と関わりがある程度の能力で、原作知識（完全消去）を対価に限界突破と2つか3つほど能力を得た気がする。確かな事はちよつと覚えてない。

なんとなくだが過去の俺は原作知識とやらが無くとも大丈夫だと確信していたらしい。

今の俺に言わせてもらえば相当困った野郎だ。

どうしようもない困ったちゃんだ。

だって、どんな物語かすら今の俺にはわからないからだ。

戦闘系なのか、日常系なのか。

興味本位で混ぜっても大丈夫なのか、危険なのか。

気付いたら主人公の事件に巻き込まれて死んでましたなど、悲惨でしようがない。

とりあえず主人公を探すところから始めようかと。

そしたら方向性が見える、はず。

日課は早朝の市内ランニング。

まさにオリ主の嗜みと言っても良いだろう。

これを始めたのはと俺が3歳の時の話だ。

能力に限界突破があることから戦闘モノだろうと当たりをつけて筋トレを始めたら父さんが何を思ったのか俺を道場へと放り込んだ。

心源流という拳法の道場だ。

ここに主人公がいる、または来るフラグなのではないかと真面目に修練をこなしていた。

そしてあるとき思い出した。

まあ、母さんや師範の爺さんが感謝の正拳突きをしていたことが切っ掛けなのだが。

そう、この流派はハンターな漫画に出てきた。

原作知識は完全消去と銘打ってあるので覚えてる時点で違うのだろう、空振りだと気づいて止めようと思ったが無理だった。

母さんの期待を無視できるほど俺は磨れていないのだ。
才能は上々といったところか。

日がまだ出きつていない薄暗い街を爆走。

スタミナや脚力がぶっ飛んできた気がする。

どうやら限界突破だが、鍛えた分だけ上がる的なアレだ。

ちなみにサボると下がるが下降率は緩やかという良心設定。

つつか別に下げなくてもいいじゃないかと思ったり。

つらつらと考え事をして待ち合わせ場所に到着。

待ち人はまだ来ていないようだ。

そいつとはここから一緒に市内を走って戻ってきたら別れるのだ。
何故だかそれが日課になっている。

「おはよー、ゆーなくん 待った？」

今日の朝ごはんから父さんのチャーハン爆撃まで思い至った頃合い
で声をかけられた。

時間にして数分、許容範囲だろう。

「おはよう まあまあ待ったな」

まあまあならいいか、などと呟いて頷いているのが俺の待ち人である。

名前は高町リョウヤ。

名前の漢字は知らない。

小学三年に上がったばかり。

長い黒髪を後頭部の中ごろで纏めたポニーテイルという髪型だ。

顔は中性的で、双子の妹とよく似ている。

髪を同じにしたら見分けがつかないかもしれない。

「リニスもおはよう」

リヨウヤの頭に掴まっている山猫を軽く撫でる。

1、2年前にリヨウヤがどこからか拾ってきたのだが、今ではいつも一緒にいる。

俺にも慣れたようで、軽くなら撫でさせてくれる。

「さて、行こうか」

ややペースを落として市内を走る。

俺に付いてくるリヨウヤを横目に見ながらいつも感心するのだ。

色んな意味で吹っ飛んでいる俺の走りに着いてきているのだから、ホントに凄いと思う。

小三でこれだから将来は一体どんな人間になるのだろうか。

とりあえず、こいつが主人公なんじゃないかと予想している。

御神流という剣術をしているし、頭も凄くいらしく、親族は美形、家は喫茶店。

まさにエロゲの主人公だ。

こいつの歳の離れた兄も候補だがその線は薄いと思う。

関わる能力があるし、同世代の誰かじゃないかと予想をつけているからだ。

だが、他にも候補がいるのでここで選ぶのは早計だろう。

まだ小学生だし、きっと物語もこいつが高校生くらいから始まるだろうし。

「えっと、なに？ そんなに見つめて」

最初の場所へと戻ってきた。

リヨウヤの頬は走っていたために上気してうつすらと朱くなり、身長差から自ずと上目遣いになっている。

なるほど、これが色々とフラグを立てている原因なのだろう。ぐにぐにと頬を伸ばして遊んでみる。

「いや、ちよつと触ってみたくなっただけ　すごく柔らかい」

「ときどき変なことするのやめてよね」

涙目になりながら、赤くなった頬を摩っている。

なるほど、これが……ともう一度ぐにぐにしそうになったが、リニスの視線によって諦めた。

感情の無い硝子玉のような瞳が背筋を凍らせた。

ときどきリヨウヤで遊ぶとリニスに睨まれる、なぜだ。

「前向きに検討する　じゃあな」

「それじゃ絶対やめないじゃんか……」

型の練習をするというリヨウヤと別れて家に戻る。

一人のほうが集中できるそうだ。

リニスが来るまでは二人でやっていたのだが、最近は全くやっていない。

まさかりニスがヒロインで将来のためにリヨウヤに何かを伝授しているとか……無いな。

くだらんことを思いつくクセをどうにかしたほうがいいかもしれない。

「おかえり、ゆうな　ところでだな」

出迎えてくれた父さんに聞かれた言葉はよくわからなかった。

夜とかに異常は無かったか聞かれたが、よく眠れただけだった。

そつえば奇妙な夢を見た気がする。

それを伝えると満足そうにしていた。

ちよつとよくわからない。

「あ、おかえり　汗かいたでしょ？　もう少しかかるからシャワー浴びてきたらいいよ」

母さんが朝食を用意していた。

父さんと母さんが代わる代わる料理を作るのだが、二人で作るとき

もある。

いつまでもバカップルで俺は嬉しいよ。

そんなことを思っていると父さんが母さんの手伝いを始めたので桃色空間から逃げることにする。

「ゆーくん、そういえばね」

思い出したように母さんが尋ねた内容は父さんと同じだった。以心伝心していると思っていたがここまでとは思わなかった。

父さんに伝えたのと同じことを伝えると上機嫌で料理を始めたので風呂場に向かう。

野菜を空中で刻む母さんなんて見なかった。

ゆで卵をデコピンして殻だけ割る父さんなんて見なかった。

俺の親は超人すぎる。

真に受けると俺の精神がやられるので深く考えないことが重要だと悟ったのだ。

登校の時間になったので家を出る。

あの二人はいつてらっしゃいの言葉すらハモる。

仲睦まじくて俺はうれしい。

うれしいんだけど、桃色空間はやめてくれ。

母さんは父さんに上目遣いで頼んだら三日で作ってくれた古本屋を

休みにするらしい。

二人でゲーセン行くとか。

仕事してください。

俺はいまだに父さんの仕事知らないんだから。

スクールバスに乗り込み、前の座席に座る。

あまり人がいないが後ろは暗黙の了解で空けなければならない。

俺が通っているのは私立の学校だ。

送迎バスがあったり、エスカレーター式だったり超ブルジョア。

学力もなかなか必要。

学費も高いので市立に入ろうと思っていたが、父さんと母さんに「
り押しされた。

リョウヤの妹がどうたら、とか。

二つくらい学年違うから顔を合わせたら挨拶するくらいだし、あま
り接点はないと思う。

「ゆうなさん、おほよう」

「おはよう」

月村さんちのすずかとは少しは仲がいいかな、と。

まあ、挨拶を交わしたらずぐ後部座席に座るので顔見知りレベルだ
けど。

だんだん騒がしくなってきたので後ろを見るとそこはリョウヤハレムだった。

三人の少女を侍らせている中性的なシヨタ。

変態には垂涎モノですね、ごちそうさまです。

金髪のベタなツンデレ少女と目が合つと睨まれた。

去年くらいにリョウヤの髪を切るうとしたのがバレて未だに嫌われているらしい。

リョウヤが女の子に勘違いされるのが嫌だと言っていたので、優しさから髪を切ってあげようとしただけなのだが。

「うっす」

「……」

「めさ」

「……」

「おはよー」

「……」

「俺はおまえが返事するまで挨拶するのをやめない（キリッ）」

「……おはよう」

朝から不機嫌そうなのは八神だ。

こいつも茶色の髪を伸ばしている。

妹が褒めてくれるので伸ばしているとか。

マジでシスコン。

足が不自由な妹を如何にして学校に通わせるかを苦心している。

あと人付き合いが苦手。

「いいか、ハヤタ 君は挨拶の重要性にもっと気付くべきだ」

「誰がハヤタだ」

「人と人とのコミュニケーション 心と心が触れ合う無限の可能性」

「聞いてんのか」

「朝の挨拶プライスレス」

妹がハヤテという名前なのであだ名はハヤタにした。

ハヤ太でも可。

ハヤブサとか呼びにくいし、しょうがないよね。

やがみっちゃんでもいいけど、怒るし。

やれやれだぜ。

授業中はペン回しの練習をする。

限界突破している俺のペン回しは108式まである。

まあ、実際にあるわけではない。

それくらいバリエーション豊富だよってことだ。

先生に指されたハヤタが答えていた。

でも小五レベルの問題をx使って解くとか違和感やべえ。

先生引いてるし、周りの生徒も戸惑ってる。

マジ空気読め。

そんなハヤタと仲良くしようとしているのはもちろん、奴が主人公かもしれないからだ。

主人公補正のお零れが貰えるかもしれない。

欠点は仲がよくなりすぎると人質にされるかもしれないことだ。

やっぱり離れるべきだろうか。

でも、いまさら離れるのも無しだろう。

難しいぜ。

飯を食い終わって昼休み。

この学校の嫌いなところは給食が無いのと男用の制服だな。

酷過ぎる。

リヨウヤとかハヤタなどその他大勢のシヨタっ子が変態に誘拐される予感。

どうにかならないのか。

などと考えながらも体は動かす。

いまの俺は三年の下級生とドツチボールしているわけだ。

ボロ負けしそうになったのでハヤタを召喚、俺はおまけです。

すでにコート上にはリヨウヤ・すずかペアとハヤタ・俺コンビしかない。

つつかすずかが投げた球が唸りをあげて飛んでくるとか非常識だろ、見た目のか弱さはどこへ行った。

リヨウヤの球は徹とやらが作用しているらしくて重いのだ。

ハヤタは前の二人と比べると劣るがそれでも喰らいつているので凄いのだろう。

俺はそんな三人から一步引いた位置で分身する球を投げるだけだった。

当たったリヨウヤが吹っ飛んだが死んではないだろう。

ハヤタの笑いが引き攣っていた。

すずかの目が輝いていた。

道場に向かうので徒歩で帰る。

帰り道を一人で歩いていると前にいた青年が金色に輝くサークルに飲み込まれた。

ゼ口魔っぽかったな。

もしかしたら今のが主人公かもしれないし、それに準ずる者かもしれない。

なるほど、異世界に召喚される場合もあるのだろうか。

明日からは道を歩くのも気を付けることにしよう。

召喚に巻き込まれたら逃走できるように煙玉とか持ち歩くべきか。

主人公なら大丈夫かもしれないがオマケの小学生なんて奴隷にされるかもしれないし、売られたりするかもしれない。

超こわい。

道場でネテロ爺さんを相手に組手をする。

何年もやっているが未だに左手だけで捌かれる。

というか片足立ちなのにこれとかさすがハンターな世界の会長だぜ。俺もハンターな職を目指すしかないな。

あとは普通に憤っ！破っ！ってやって終わり。

爺さんの残像出しながら音を置き去りにする正拳突きは見なかったことにする。

まあ、家でも母さんがやってるから今更見てもなんとも思わないが。

家に帰ると父さんと母さんが料理を作っていた。
何かあったかと聞かれたが、いつも通りだったので普通と答えた。
なぜかちよつと残念そうだった。

夕飯はチャーハンだった。

超チャーハン盛だった。

嬉しそうに頬張る母さんを見て父さんは俺に弟と妹、どっちが欲しいか聞いてきた。

死んでほしいと思った。

あとは夏休みまで平凡な日々だった。

ずずかが週3日くらい母さんがやってる本屋にきてほのぼのと過ごせたのは素晴らしい思い出です。

によよしている父さん母さんは記憶から消したい。

リョウヤのペットにユーノというオコジヨ（？）が増えたのもいい思い出だ。

街の至る所が壊れたりしたが平和だった。

サッカーの帰りに街が崩壊しかけたのもいい思い出だ。

異常気象もあったけど、温暖化が原因だと思う。

高町ツインスが学校をよく休んだが平和だった。

金髪のツンデレがイライラして俺に当たり散らしてきたけどいい思い出です。

高町ツインスに金髪ツインスな友達ができたらしい。

テスなんとかだった気がするが横文字は苦手だ。

ハヤタも家族が増えたらしい。

クール、ツンデレ、人妻。

こいつもハーレムを着々と気づいている。

すずかとのお茶が俺の癒し。

双子の猫が俺を和ませる。

主人公候補も増えたりして困るがまだ問題らしいことは起きていないので大丈夫、俺は元気です。

後編

この世界はどのような物語なのだろうか。

俺はこのままでいいのだろうか。

主人公をこそこそと探し、緩慢に生きる。

主人公を見つけたら、自分の生き方が決まるって思っていた。

それは正しいのだろうか。

俺は、知識を捨てる前の俺が望んだように生きているのだろうか。

というアニメ 後編 (A, S)

いつものようにバスで学校に通う。

リョウヤハーレムに変化が生じた。

金髪ツインスが増えるらしい。

今は転入試験で学校に向かっているとかなんとか。

双子のテストロッサ兄妹と聞いたが名前は知らない。
接点もリョウヤしかないので積極的に話すこともないだろう。
ただ、テストロッサ兄が主人公ではないかと疑っている。

顔もよく似ているので、髪型を同じにしたらきっと妹と瓜二つだ。
なんとも不思議だがこれが常識なんだろうか。
日本語がやたらと上手いのは凄いなと思う。

「よう、おはよう」

「ああ……おはよう」

「元気ねえな 寝不足か？」

「ん、まあな……」

最近のハヤタはなんだか元気がない。
しかめっ面していたのだが、今では深刻そうな表情をしているほうが多い。

寝不足の日が多くて授業中に居眠りしている姿をよく見かける。
主人公によくある過去のトラウマイベントでも起きたのだろうか。

うかつに話を聞いて地雷を踏んだら困るのでそっと見守ることにする。

俺にできることなんて無いからだ。
たぶん、きつと。

今日も俺は付かず離れずの楽なポジションで生きている。
なのに、なんで俺はこんなに気になるのだろうか。

いつものように早朝の日課をこなすのだが、ハヤタと同じようにリ
ヨウヤも上の空。

夏休みを終えてからこんな感じなのだが、どうしたのだろうか。
深く関わるべきか、無視するべきか。

俺が混ざって安全なのだろうか。

「見つめてきてどうしたんだ」

「いや、見つめてきたのはゆーなくんでしょ」

俺が見つめていたらしい。

無意識だったのだろう、気付かなかった。

リヨウヤが俺を見て困った表情を浮かべていた。
なんか失礼じゃなからうか。

「ゆーなくん、あのね」

「うん？」

「夜は外出しないようにね 危ないから」

何を言っているのだろうと、疑問をぶつけようかと思ったがリョウヤの真剣な表情を見たら言葉が出なくなった。
なにかがあるのだろう。

主人公としてかもしれないし、他の要因かもしれない。
ただ、友達を信じるのは大事だ。

「……そうだな 特に用事もない限りは外出しない」

「できれば今年いっぱいには外出しないで欲しんだけどな」

「善処する」

「またそんなこと言って……」

苦笑いを浮かべるリョウヤに聞きたい。

おまえは何を心配しているのか、と。

でも関わることを決めかねている俺には聞けない。
過去の俺はなんてことをしてくれたのだろうか。
能力なんていらぬから原作知識を返してほしい。

父さん母さんも少し考えごとをしている時間が増えた。

どうしたのだろうか。

何か気になることがあるのか尋ねても、何があっても大丈夫の言葉で問答を受け付けない。

何かがあるってことなんだろうか。

本屋にも顔を出す時間が減っていた。

俺が店番をする時間が増えた。

ただ、変化はそれだけなのだろうか。

冬もの訪れを感じさせるくらい寒くなってきた。

そんな折、すずかに友達ができたらしい。

その友達というのがハヤテちゃんらしい。

少し驚いた。

そしてハヤテちゃんが入院したらしい。

それに合わせたかのように、ハヤタが学校を休みがちになったのを思い出した。

心労が祟ったのだろうか。

俺にはノートを見せるくらいしかできない。

いや、やらないのだ。

どうすべきなのか答えが見つからないことにイラついているのか、どうも落ち着かない。

すべきことがあるのだと頭の中で何か知らせてくるが、何をすれ

ばいいのだろうか。
俺の気分は晴れない。

ハヤタが久しぶりに学校にきた。

なんだか、やつれた気がする。

時間が足りない、効率が悪いと呟いている。

時折、俺と目が合うと遣る瀬無さそうに首を振っている。

なんでこいつは追いつめられている印象を俺に与えるんだろうか。

俺の力が必要なのか。

そんなわけないよな。

大丈夫だよな。

聞きたくても机に伏して眠ったハヤタに聞くことはできなかった。

11月の中頃になると、学校で欠席する生徒が多くなってきた。
インフルエンザや風邪が流行っているとはニュースで見たが学校の
連絡でそのようなことは聞かされていない。

クラスでも欠席者が数人出ている。
入学したての頃や学期の初めにハヤタに話しかけていたやつらだ。
途中からハヤタの愛想の悪さに諦めて小さなグループを作っていた
のだ。

すずかのクラスでも欠席した生徒が数人いると聞いた。
そいつらも入学したり、学期が始まったときに馴れ馴れしく話しか
けてきたやつらのグループらしい。
リョウヤにちょっかいかけて、金髪ツンデレにキレられて一切近寄
らなくなったらしい。

他のクラスにいるやつらも似たり寄ったりだ。
何か関係があるのだろうか。
そして、何が起きているのだろうか。

そんななんとも言えない不安に包まれている日々の中、すずかと金
髪が黒いワゴン車に押し込まれていた。
金髪の執事のおっさんが誘拐うんたらって言ってたので、きっと誘
拐されかけているのだろう。

主人公がここでフラグ立てるのかと思ったが特にいない。
しょうがないのでオリ主な俺が解決することにした。
異世界召喚対策として持っていた煙玉を走り出そうとしている車に
投げつける。

そしてダイナミックエントリー。

動いている車のドアを映画のエイリアンよろしくこじ開けて二人を抱えて逃走。

歩行者が轢かれたり、事故が起きるかもしれないが俺にはどうしようもない。

きつと主人公が助けしてくれるだろう。

金髪に礼を言われて驚いたのは仕方ないと思う。

金髪が警察とかの対処をしてくれるそうなので有り難く、その申し出を受けることにした。

すずかの家が心配だからと迎えにきたので見送ろうとすると礼があると連れ込まれた。

すごく、ブルジョアです。

こんな超絶豪邸を見るとは思わなかった。

本物のメイドさんとか生で見るとは思わなかったが、凄いモノだ。

そして猫がいた、いっぱいいた、まさに猫天国だった。

ここが俺の桃源郷……。

すずかのお姉さんにお礼言われたり、すずかにお礼言われたり、金髪にお礼言われたりして過ごした。

金髪が名前で呼べと言われたのでアリサと呼ぶことにする。

あとはお茶会したり、夕飯食べてお暇させてもらった。

アリサがすずかの家に泊まるらしいので玄関で別れる。

送るとい話もあったが、走って帰ることにする。

考え事もしたかったところだ。

後ろに流れる風景を横目に考えるのは欠席している生徒のこと。リョウヤとハヤタが関係しているのは間違いないだろう。

主人公っぽいと当たりを付けていたところのこれだ。

関係がないとは言えないだろう。

原作開始前の事件だろうか、それともすでに始まっているのか。

関係ないのかもしれないし、重要な出来事かもしれない。

リョウヤとハヤタの関係はどうなっているんだろうか。
敵か仲間か。

それとも無関係なのか。

そもそもこの物語はどんなジャンルなのだろうか。

リョウヤと待ち合わせをしている公園まで走り抜けてきた。
真っ暗な公園には誰もいない。

少しベンチに腰かけて休もうかと思い、自販機で飲み物を買う。
ココアを選び、飲み物を取ろうと屈み、空気が凍った。

言葉ではなんとも表現できないのだが、重くなったというか。
色を失ったというのだろうか。

そう、母さんが本気で怒ったときの雰囲気似ている。

「アンタは……」

振り返るとそこにはハヤタ家の素直クールがいた。

リョウヤと同じようにポニーテールにしている桃色の髪。

女性にしては高い身長

怜悯な印象を与える顔ではあったが今は険しい表情をしていて、
見
つめられる俺はうすら寒く感じる。

格好は鎧を軽装にしたような動きやすそうなモノで、手にはメカメカしい剣が握られていた。
コスプレとしか思えないのだが彼女の表情を見る限り遊びではないようだ。

「兄上の友人である貴方に手を出すのは禁じられていたのだが」
ゆっくりと剣先を俺に向ける桃クール。
威圧を感じて頬から汗が流れる。

「時間がないんだ………すまない」

「っ!？」

背筋が冷えるような感覚を覚えた。
ココアをその場に放って転がるように離脱。
容器が真っ二つになり、中身が地面にぶちまけられた。

欠席者多数の原因は、こいつか？

なんとか避け続けているがどうもやりにくい。
主人公が来るまで待つのか、それとも俺はモブとしてやられるべきなのか。

俺は手を出していいのか、どうするべきなのか。

手を出して安全なのだろうか。
兄上は間違いないくハヤタであるが、ハヤタが俺を害さないという保証はない。

だが、禁じているらしいのでハヤタの意に反した行動なのだろう。
時間をかければ助けに来る、のか？
俺はどうすべきだ。

「シグナム！！ やめろ！！」

体が温まり、うっすらと額に汗をかき始めたときにハヤタが飛んできた。

文字通り飛んできたのだ。

桃クールに似た軽装の鎧を着ている。

色は黒。

手には大ぶりなメカメカしい槍。

「約束を違えたことは謝ります、兄上 ですが止めないでください」

「な……！？」

戦闘が終わるかと思ったところへの不意打ち。

腹部に焼けるような痛みを感じて地面へと倒れた。

腹から何かが流れ出てる気がする。

砂利とか全然気にならない、ホントに。

「おい、枯葉！？ シグナム、おまえ……！！！」

焦っているハヤタを見るのは珍しいと思う。

そして、もつと珍しいものが見れた。

「ゆーなくんから離れる！！！」

空を飛んできたリョウヤは泣いていたのだ。

ああ、本当に懐かしい。

数年前に公園で泣いていたとき以来じゃないだろうか。

みんなコスプレしている。

いや、していない俺こそがこの場では異端なのだろう。

不思議な光が飛び交う中、激しい打ち合いをしているリョウヤとハヤタ。

桃ピンクも相手にしているためにリョウヤは押されている。

やはり主人公はリョウヤなのだろうか。

それともなんらかが原因でハヤタにトラウマが出来るイベントが進行しているのだろうか。

俺はこのまま見ているだけなのか。

俺は見ているだけでいいのだろうか。

見ているだけだとイライラするし、動こうとすると何か之急かすようにそわそわする。

きっとこの物語は戦闘モノだ。

俺の方向性はどうかやら少しは似ているらしい。

どうすべきかはわからないが、どうしたいかはわかった。

悩むのは後でいい。

今はしたいようにさせてもらおうことにしよう。

少しくらい原作が歪んだって問題ないだろう。

隙について桃クールを蹴り飛ばす。

リヨウヤとハヤタは勝手に戦うだろう。

俺も好きにさせてくれ。

だから今は

「仕切り直しといこうか、シグナム!!」

俺自慢の正拳突きで、ピンクール侍の綺麗な頬を殴らせろ

腹から流れる血なんて気にならない。

主人公のことなんて気にしない。

原作のことなんてどうでもいい。

だから、楽しくなりそうだ。

後編（後書き）

ゆうな君の周りで何があったかを後で書くかもしれないけれども終わりです。

s t s とか出番無さそうだし。

すずかとアリスと幸せに暮らせればきつと満足です。

おまけ 超箇条書き(前書き)

筋道をテキストにかいたやつです

おまけ 超箇条書き

魔法少女リリカルなのはとその他いろいろが混ざった世界が舞台
転生者、憑依者多数

おまけ

原作3、4年前

「よう、少年 一人で何してんの」

「……何もしてないよ」

「いつも女の子といるよね 仲良いの？」

「妹だからめんどろう見てたけど、今はいらないみたい」

「ふうん じゃあ、暇だよな 俺と遊べるじゃん」

「いや、いいよ 君もなのはと遊べばいい あの子はさびしがり屋
だから友達が多い方がいいと思うし」

「いや、あつち一杯いるからいいや それに泣いてるのを見たら放っておけないだろ」

「……泣いてなんかないよ」

「まあ、いいけどね 俺の名前はゆーな」

「ゆーな？」

「うむ ゆーな君と呼べ」

「ゆーなくん」

「上出来だ 少年の名前も教えてくれ 名前やあだ名で呼び合ったら友達だって母さんが言ってたぞ」

「ぼくの名前は……」

高町パパ入院のとき。

転生者多数に囲まれてハイパーなのは逆ハーレムタイム。

リヨウヤくんがその他の転生者だと思われてハブられる事件発生。

慣れない生活、なのはの世話、不安定な家族、掠め取られた妹などの要因からリヨウヤくん半泣きでいじける。

その瞬間にシヨタにフラグを立てるゆうな君。

これを機になのはが男性恐怖症になる。

転生者が馴れ馴れしかったのが原因。

リヨウヤにべったり、ゆうな消える状態。

リヨウヤ ゆーなくん 懐いた

ゆうな リョウヤ 懐かれた

リョウヤくんは転生者です。

同時期

「はあ、マジ天使……」

「どうしたよ、八神」

「うおっ!!!?!」

「おいおい、大丈夫か ん、写真落としたぞ?」

「返せ!!」

「ぶっん?」

「何にやにやしてんだ」

「かわいいけど、八神の好きな娘?」

「……妹だよ まあ、かわいいのは同意してやるけど」

「シスコンってやつか 俺の友達にもいるけどな」

「……もういいだろ」

「んで、八神の妹さんの名前は？」

「……知ってんだろ」

「知らぬ」

「嘘つくなよ」

「俺が嘘をつくときはきゅうりを残す時だけだ 失敗して感謝パンチされちまったぜ」

「（感謝パンチ？）はやてだよ」

「はやてか お、閃いたぞ」

「……なにをだ うちには呼ばないからな」

「いや、別に行かねえから おまえのあだ名だ」

「は？」

ハヤタ誕生。

転生者に紹介しろと馴れ馴れしく迫られて人見知り状態に突入。

モブどもが近寄るんじゃないやねえオーラを醸し出して孤立するもゆうな君の能力に破られる。

ゆうな君的には孤立しているハヤタを小学生が免疫のない恋愛話で

弄って馴染ませようとしたが、妹魂にあえなく失敗。
あだ名をつけて友人となる。

結局原作突入時にハヤタの友人はゆうなオンリー。

話すのは嫌いじゃないが照れてハヤタからは話しかけない。
はやてもきつと兄の人見知りに泣いていることだろう。

ハヤタ ゆうな 友人（親友）

ゆうな ハヤタ ツンデレ

無印時

すずかと知り合いになってお茶したり、リョウヤがりニス拾ったり
早朝ランニングで出会ったり、ハヤタがはやてを学校行かせようと
苦心したり、ゆうながロツテ・アリアの双子猫を肩に乗せて八神家
に遊びに行つてハヤタをビビらせたりしつつ、原作突入。
原作通りだがアリシア・クローンでフェイトの兄が出現。
リョウヤとガチバトルで友情フラグ、と見せかけて不仲。
しかし最終戦プレシア城は協力マルチプレイ。

「ゆうなくん！！ ぼく、やりきつたよ！！」

「ん、よくわからないけど頑張つたな」

「うん、ありがとう！！」

「まあ、声が疲れてるしゆっくり休めよな」

突然の電話、会話を一部抜粋

この間にハヤタが闇（夜天）の書の魔力のためにジュエルシードを確保するか悩むが結局行動せずに無印終了。
テストロツサ兄妹は連行 兄がいるためにハラウン家の養子にならないフラグ。

ここからはプロットもどき

無印 A's までの空白期

闇の書が覚醒。

ハヤタも A's 開始に覚悟を決める。

接触しようとしてきた転生者を闇討ちしてデバイスを奪い、改造する。

はやてに秘密で夏休みを利用してリアルモンスターハンターしてリ
ンカーコア狩り。

あまりの効率の悪さと転移の燃費の悪さにビビる。

が、管理局に捕捉されたら困るので神経をすり減らしながら頑張る。
偶然を装ってゆうなの家の本屋に行くのがハヤタの癒し。

闇の書について調べている管理局所属の転生者を片っ端からロツテ・
アリアが排除。

遺体はスカさんが処理しました。

劣化戦闘機人の出現フラグ。

A' S 編

ペースが悪くてハヤタが無理して頑張る。

シグナム、魔導師の魔力蒐集を提案するも却下。

せめて、友人のゆうながSクラスの魔力があるので蒐集しようとするも禁じられる。

交代制で蒐集。

学校に行っている時間はシグナムとその他。

帰ってきたら交代してハヤタとその他。

怪我をしようともゆうなと話すために全力で学校へ向かうが、寝てしまう。

次こそは、次こそは、と学校へ行く。

学校 狩り 学校の無限ループ突入。

ヴォルケンがハヤタの姿を見ていられなくて11月から魔導師を狩り始める。

無限ループで疲れ切ったハヤタの姿にシグナムがヤンデレる。

ゆうながいる　ハヤタが疲れる
ゆうながいない　ハヤタ元氣
ゆうな倒す　魔力うまい^q^

シグナム暴走。

私が責任とるからまかせろー　ばりばりー

ヴィータとかシャマルとかは周辺を警護。

犬は家でハヤタとはやての見張り兼お留守番

シグナム：うおおおおー！こつちが大変なのにココアなんて暢気に
買ってんじゃねえええー！非殺傷なんて知らぬー！死ぬよらあああ
ああー！！

ゆうな：ちょwなにこいつwww

開戦。

リヨウヤ、魔法の練習で夜遅くなる。

ヴォルケンを警戒しつつ帰路につこうとするとなんと待ち合わせし
ている公園に結界が！！

誰かが襲われているらしいので助けに行く。

ヴィータはリニスに任せた！！

結界の一部をバリバリして侵入。

飛んでいくとシグナムに殺傷設定で斬られるゆうなくんの姿とベル方式に似たバリアジャケットを着た少年が見えた。

ドッチボールのときにときどき見かける八神はやての兄だと気づく。倒れたゆうなくんに近づく八神兄を見て蒐集しようとしていると予想。

ゆうなくんに何してるんだ！！と突撃 斬撃

リョウヤ参戦 ゆうな離脱

倒れてたゆうなが起き上がってシグナムを蹴り飛ばす。

「原作とか気にして我慢してたのに、好き勝手やりやがって死ね阿婆擦れがああああ！！」

俺の母さん直伝の感謝パンチでぶち殺してやんよ！！

血とかハイになったら気にならないぜ！！

むしろ楽しくなってきたあああああ！！

ゆうな、シグナムとタイマン。

リョウヤはハヤタとチャンバラ。

完

おまけ 超箇条書き(後書き)

じねはひじい>g>

s t s 前まで (前書き)

ボツになったやつです

寛大な心で読んでやってね!!!

s t s 前まで

というアニメ

A・Sのそれから

12月25日 早朝 ハヤタ

「闇の……いや、夜天の書の管制人格、でしたっけ あの娘」

真っ黒だった。

闇を覗きこんだような、そんな黒。

「助けたいでしょう?」

黒い艶のある髪の毛は乱れることなく腰まで伸びている。
こちらを見つめる瞳に輝きは一切なく、ドス黒く濁っていた。

「私なら助けることもできますよ　まあ、貴方の今後を貰いますけどね　どうしますか?」

能面のように無表情だった女性が笑う。

軽く口角を上げるだけの变化だったが、それだけで背筋が凍るような恐怖を覚えたが消え去る運命しかなかった初代リインフォースのことを考えると頷いてしまった。

「本当に都合よかったです　私は幸運です」

得体の知れない相手の言葉を鵜呑みすることは平時の自分だったらありえないことだ。

だが、今はこの相手の言葉を振り切ることができそうにない。

「覚えておいてくださいね　管制人格は貴方の首輪になるってことを」

リンクス（首輪付き）の誕生ですね。
くすくすと笑う女性が怖い。

「私は上に行きたい　貴方はそのための駒です」

その濁った瞳が怖いのだ。

女性が影に溶けるように消えた。

期待していますよ、八神ハヤブサくん

頭の中に声が響いたようだった。
俺は間違っていたのだろうか。

12月25日 早朝 アマネ

『アマネ艦長、若いツバメを困ったのか 逆ハーとか恥ずかしくな
い？』

「……何を勘違いしているのかわかりませんが彼は役に立ちそう
だから接触しただけですよ ホントは甥に手伝ってほしいんですけ
ど、ちょっと怖いですからね」

『甥って……まあ、いいけどな しかし、時期とかよくわかったな
俺も原作とか見てたけど管理局にいたらさっぱりだったわ』

「無限書庫さえ掌握してしまえばそこから管理局の情報を得ることだって可能なんですよ。あとはハラオウン提督の動向を見張れば完璧です。グレアムは邪魔してきたので不快でしたが」

『おお、こわいこわい。その情報を利用して逆ハーとかマジ羨ましい』

「イラッときたので任務に就いてもらいますか。キツくてツライやつ」

『え、ちょ?』

「今流行の装甲服の集団を摘発してもらおうかな」と

『冗談だよな?』

「マジです。管理局員の死傷者が多いので我々も重い腰を上げざるをえないのです。都合がよくて私は幸せです」

『すみません、勘弁してください』

「これがご都合主義ってやつですか。愚かな部下が死にかけて覚醒するイベントかもしれないし、わくわくしますね」

『……死んだ。俺は死んだ』

「おや、今から武者震いですか」

『ちげえし!! 死に瀕して怯えてるだけだ!!』

「……はあ、いいですか？ 私は使えない部下がいららないんです」

『……がんばります』

「ええ、期待していますよ 無能をいらないので早期解決しか許可
しませんから」

『……死亡フラグだろ、これ』

12月25日 夜

ここにはゆーなくんがいないのにあいつらの家族がいる。

今は直視したくなかった。

どうも感情の制御が難しい。

前から約束されていて楽しみにしていたクリスマス会だが、今は早く終わって欲しかった。

僕だってハッピーエンドを望んでいた。

あいつはそれを掴んだ。

それが無性にイライラする。

思えば我慢ばかりだった。

原作のため、家族のため、主人公のため。

原作よりはあいつらにとつては幸せだろう。

でも、一番の友人がここにいない自分はいままで頑張った意味があったのだろうか。

邪魔しないように、慎重に事を進めて、手助けすらした。

それで得た見返りが友人への殺傷設定だった。

それなりのペナルティは受けるだろうが、騎士どもが消えることは無くあいつらはぬくぬくとぬるま湯で生きるのだろう。

これが一番の結果だとわかっている。

それでも許せないのだ。

だって、ゆうなくんから得たリンカーコアの意味なんてほとんどなかったんだから。

無駄に襲われて、今は入院しているだけだ。

彼が得たモノは無く、あいつらだけが……。

「リヨウヤ？」

「ん、どうしたの きょう兄」

「いや……なんでもない」

「あはは、変なきょう兄だね」

僕の家族が来ていて、すずかやアリサに魔法の説明をする目的も含めていたのを思い出した。

楽しそうにしているが今の心境では混ざれるとは思えない。

なのはが楽しそうに笑っていた。

そういえばゆうなくんが入院したと聞いた時も普段通りだった。いや、笑ってすらいた。

原作のために生きて、意味があるのだろうか。

結局、主人公たちが報われるだけではないのか。

このままでいいのかわからない。

ただ、今はここにいたくないと思う。

そつと抜け出し、リニスを抱きしめて夜の冷たい空気を胸いっぱい
に吸い込んだ。

1月4日 早朝

いつも通りの修練を行う。

入院とか退屈なので抜け出てきたのは秘密だ。

ギプスが邪魔だが無視して動かしまくる。

バキが何かの漫画でギプスつけたままトレーニングして自己再生が云々で治ったって読んだ気がするし、治りが逆に早くなるかもしれない。

魔法の言葉、限界突破。

今日はリョウヤもないので一人で訓練。

なんか旅行に行くとかなんとか言ってた。

行きたくないと言いつ出したリョウヤが病室まで逃げ込んできたがスコンな兄とその他ヒロインに連れて行かれた。

主人公の過去イベントだろうか。

回想とかヒロインとの思い出を語るときのやつ。

濃いゲームですね、ここは。

俺の襲撃も主人公覚醒とかそういつたのに飲み込まれて、「そんなこともあったね、あははー」みたいな感じになるのだろうか。

ちょっと悔しいと思うがどうしようもない。

やっぱりリョウヤが主人公かもしれない。

ハヤタは負けてたし、ピンク侍を退けたし、俺は死亡フラグ立てながら倒れたし。

なんかテンパってたリョウヤを思い出すとこんな俺でも一応は大事にされてると気づいて嬉しくなった。

悪友とか、時々出てきてアドバイスするちょい役を狙えるポジにいると予想。

モブかもしれないけど。

走っていると道の途中で最近は見かけなくなった双子の猫が倒れているのをみつけたので保護する。

傷だらけで血が出ている。

動物の怪我についてはわからないがこれはひどいかもしれない。

「治療したいから急いでんのに……」

黒く輝く幾何学的な文字が施された陣が展開されているのを眺めている身としては現実逃避って大事だと思うわけだ。

ピンク侍も似たようなのを足元に展開してたのでそういう系統なのだろう。

人外が跳梁跋扈してて変な世界だったがまさかこんなにイベント盛りだくさんだったとは。

今は主人公が不在なのでおかえり願いたい。

あれか、主人公が退けるイベントを原作を歪めてしまったので俺が対処するとかか。

マジかよ……。

「俺としては言葉が伝わるなら目的とか教えてくれると嬉しいけどな」

少しの時間、明滅を繰り返しながら陣から現れたそいつはピンク侍とは勝手が違うらしい。

仮面、というかフルフェイスのヘルメットに近い形状の機械に覆われていて顔が見えない。

身体もメカメカしい装甲で覆われていて、大柄に感じるが背丈は父さんと同じくらいだろうか。

双子猫に視線を向けながら殴りかかって来たので俺との友好ゲージは零だ。

「ボディランゲージは偉大ってか ぶち壊して中身剥ぎだしてやんよ」

なんか戦闘する機会が増えた気がしないでもないが、経験が積めるのだと諦めることにする。

重心のブレ、体幹の不安定さから武術の類は学んでいないと予想。猫をギプスの付けていない左腕で抱えて様子見をしつつしかけることにしよう。

とか余裕ぶつてたら死角から攻撃くらった。

ちらつと見えたが俺の左側の空気が歪んだっばいあとにパンチされた。

異次元攻撃とか俺の専門外だ。

なにこいつこわい。

間合い無視の無差別格闘はかなり厄介だった。

避けた攻撃が当たるまで狙い続けるとか反則過ぎる。

殴ってもバリアっばい光に防がれて無効とか。

イベントバトルか、これ。

見様見真似の貫でバリアを抜いて殴り飛ばすが、イマイチの出来だったので軽減された。

どうせ攻撃が当たるのでゼロ距離で殴りあう。

相手よりも速く殴れば反撃されないんだよ！！ってノリで殴り続ける。

ラッシュのあと格ゲー風のエアリアルコンボに続けて最後に地面へと叩きつける。

蜘蛛の巣状にコンクリートが罅割れる。

KATEEEEEEEEって叫びたくなるほど硬い。
装甲も歪んだり、砕けたりしていてダメージは与えているのだが
まだ動けるらしい。
普通に殴っても倒せそうにないので趣向を変える。

震脚で踏みつけなければいい感じのダメージを与えられるんじゃない
だろうか。

地面を砕くし。

母さんみたいに足跡の形が地面深くまで刻まれるくらいなら一撃な
のだから、そこまでの威力と練度は無い。
とりあえず何度か剄を込める練習も兼ねて震脚。

まだ起き上がろうとしているのでG並の生命力に辟易しているとメ
カニカルな相手の下に陣が展開された。

逃げられては困ると止めを刺そうと踏み込むが空間を歪めて防が
れた。

だから超次元な人物との戦闘は嫌なのだ。

道場のじいさん、両親、両親の親族、高町家などその他もろもろ。
もう少し常識の範疇で生きて欲しいものだ。

なんて考えていたらメカニカルな敵が光るリングで拘束されていた。
また超展開な事件ですか。

勘弁してくれ。

「愚図な部下を持つと私のような優秀な上司が大変ですね ああ、
大丈夫でしたか？」

「あ、大丈夫……シユユさん？」

「ああ、ゆーなくん 久しぶりですね」

「え？ なにこれドッキリ？」

「それは……ギル・グレアムの使い魔……？」

「え、猫ですけど？」

「困ったことになりますね 減給か降格か、難解事件への挑戦か、途中で捕縛に失敗して逃がしたあの馬鹿にはそれなりに覚悟してもらうしかないですね」

「え？え？」

「ちょうど近くに來たので挨拶しに行くつもりだったんですよ さあ、帰りましょうか」

「ええー？」

母さんの妹のシュユさんがリョウヤやハヤタと同じような光で双子猫を包んだ。

ぽやあつてやつ。

服装はスーツっぽいが見たこと無い格好だ。

うわあ、未知との遭遇で実は親族が〜とかいやすぎる。

もう俺の理解力が限界突破してるんです、勘弁してください。

新暦69年

やっぱり仕事は強襲任務が一番楽だ。

何も考えずに適当に魔法を開幕ぶっぱしてメメタアって敵を殴れば終わるとか楽過ぎる。敵が多かったらメギドラオンでございまずで全員しぬ。

いや、ホントに殺すわけないけど。

非殺傷です、マジで。

え、嘘っぽいつて？

俺だって生活あるからちゃんと守ってんだよ、ルールくらい。

結構マジメだぜ、俺。

世話になった孤児院に仕送りして、妹や弟と遊んだりして、順風満帆。

絶好調で月光蝶。

さすが孤児院のおにーさん！！つてくらい凄い、はず。

どんくらい凄いかつて言うとかガジェットとかいうおもちゃも粉碎、戦闘機人も梃子摺ったが撃退した。

隊長とか傷ついてたけど大丈夫そうだから大丈夫だろ。

こいつらが死ぬとか想像できねえ。

あ、でもクイントとかメガーヌの娘が泣く姿を見るのは俺の癒しが失われるかもしれないので全力で死守した。

疲労してたがだいじょうぶだろ。

あと同僚がトチツて死にかけてもメディアアラハンでこっそり回復させるくらい凄い。

ティアナちゃんマジ天使。

あの娘のためならなんだってするわ。

ティーダ？

あー、生きててよかったねー。

妹を誤射しかけた馬鹿はシスコンランスターの餌食になった。

しょうがないよね、シスコンにとって妹は魂なのだから。

まさに妹魂^{しすこん}。

なんてちよつとテンパってるのは俺に子供が出来たからだ。

結婚したわけでも出来ちゃったわけでもない。

なんか研究所から助け出した少年が懐いたから俺が保護するとかなんとか。

あ、うるせえぞテストアロツサ少年。

おまえは執務官試験の勉強してろや。

先輩に「抱き締めたいな、少年！」ってされても知らんぞ。

おとめ座はこわいんだぞ。

話は逸れたが俺が保護するのはこの赤髪のシヨタだ。

レックスと呼びたいが違う。

エリオという名前があるらしい。

ちよつと残念だ。

「蒼い炎が綺麗だろ、俺のデバイスだ」

「デバイス……鳥じゃないんですか？」

「試作型独立戦闘支援デバイス 型番は……忘れた 名前はドミナント、そう呼んでやってくれ」

「ドミナント……」

ドミナントも懐いてるしなんとかなるだろ。

ダメならダメで諦めるしかない。

しかし、普通は少女を保護してフラグ建造するんじゃないの。

あ、幻想か。

そうですねー！。

追伸

テストロッサ少年がなんか落ち込んでるが無視しよう。

執務補佐とか面倒だが、上から紹介されたから仕方なく連れてくるが優秀ではある。

気にし過ぎて繊細なところをどうにかしてほしいけど。

あと組織クラスの大きな犯罪集団に殴り込むときは尻狙われてるって気付いたほうがいい。

女顔の罨だな、これは。

あと、エリオは素直でいい子です。

家事手伝いしてくれるし、勉強もキチンとやってるみたいでお父さんは嬉しいよ。

魔法？

俺のレアスキルだからテストタロツサ少年に任せた。
体術ならまかせろー、ばりばりー。

ゼスト隊長と素手で張れる俺に不可能はない、はず。

女っ気が欲しいけど、むさくないという。

そういうことで結構楽しく生きているわけです。

新暦71年

第6管理世界に竜を使役する人たちが住んでいるらしい。

俺自身も魔導生物に手伝ってもらっているので、こういった人たちの話は
ためになる。

どこに行けばいいのだろうかと宛ても無く彷徨うのはいつものこと
だ。

一人旅のいいところは自分勝手にフラフラしても文句を言われない
ことだ。

旅をするなら荷物も多く必要なのだが魔法は本当に便利である。

転移・空間・e t c

こういった魔法を利用することで軽装でも長旅が出来るので魔法を
見つけた人物を崇めたくなる。

日が傾き、風も出てきた。

一人で悶々と考え事をしながら歩いているとちらりと人影を見つけた。

久しぶりに人と話せると思うと嬉しくなった。

やはり慣れているし、気ままに過ごせるからと言っても人恋しいことには変わらない。

足早に近寄るとその人影は小さな竜を引き連れた幼い少女だった。表情が暗く、どこか怯えている。

この少女の名前はキャロというのだとか。

どうやら一人旅をしているらしいがさすがに幼すぎやしないだろうか。

キャロが寒さに身を震わせたので白衣とマフラーを渡す。

スカさんから奪い取った白衣はかなりの上物だからキャロを暖めてくれるだろう。

断られたが無理矢理着させると寒さも落ち着いたようだった。

キャロの竜を毛繕いしながら詳しい話を聞いてみるとしよう。

キャロは俺が目的としていた竜を使役する一族らしいが力が強すぎて追い出されたらしい。

波乱万丈すぎて何度か確認してしまった。

着の身着のまままで食べ物もあまり貰えなかったらしい。

キャロの可愛らしいお腹の音が聞こえたので、ご飯にしようと思う。顔を赤らめながら恥ずかしそうにしつつ、申し訳なさそうに食べる姿は一人旅の疲れを癒してくれる。

焚き火の前で話しているとかなり疲れていたのだろう。

キャロは寝入ってしまった。

テントに小さな竜と一緒に寝せてやりながら火を眺める。

どのくらい時間が経ったかはわからないが、火から離れたら周りが全く見えないくらい闇に包まれていた。

そろそろ寝ようかと思い、立ち上がると通信用のデバイスが鳴った。立体ディスプレイに眼帯をつけたちびっこが現れた。

少し前に仕事に失敗して眼帯をつけることになったらしい。

こいつらの長兄に中二病と馬鹿にされていたのがかわいそうだった。どうやらスカさんが俺に用事があるから早く帰れということらしい。そんなに難しいこともしないだろうからすぐに旅を再開できるだろう。

ここでキャロを置いて行くのもいいが、情が湧いてしまったので連れて行くことにする。

一種の誘拐だが構わないだろう。

だってスカさん自身が犯罪者のなモノだし、俺も同種だ。人攫いくらいやっても自然なことだろう。

等と思いながらキャロを担ぐと管理局員に襲撃された。

過激なことだが、スカさんのデータベースで見たことある人物だった。

手加減知らずのアマネ提督の忠実な部下で、ベルカ式を操る八神の兄だ。

妹は闇の書本体を所持しているし、騎士どももつるんでいるので怨みは向こうに集中するしこいつだけなら動かしやすいのだろう。

相棒にアインとやらがいたはずだが……空が輝くほどの魔力弾。アウトレンジから大火力魔法とか鬼畜か。

わざわざ戦闘する意味も無いのでさっさと撤退するでしょう。キャロを起こすのも忍びない。

近接をしかけてくる八神を蹴り飛ばしてロコンに指示して遠くに浮かんでいるアインに火球を撃ち込んでもらう。

命中は確認せずに転移魔法陣を展開。

起き上がって反撃しようとしている八神にバインドを当てて魔力弾をおまけしてやる。

適当に魔力を込めた砲撃を無差別にまき散らして転移完了。

5秒かかってないと思うがどうなのだろうか。

途中でいくつもの管理世界や管理外世界を経由して転移場所を悟られないように誤魔化してスカさんのところへ行く。

なんかナンバーズの長兄を改造するから見てくれとかなんとかか。

俺、いらんないんじゃないだろうか。

機械とかロボとかよくわからないし。

デバイスは使えるけどメンテできない。

この長兄は管理外世界まで行ったのだが管理局に掴まって本局まで連行されたらしい。

スカさんからあつちに嘆願して解放してもらったとかでボロボロになって帰って来たときは妹たちも驚いていた。

優秀な魔導師と使い魔を仲間にしうとしたが失敗したとか。

なんで管理外世界に優秀な魔法関係者がいるんだ、と思っただが俺には関係ないのだろう。

まあ、このまま付き合つのも楽しいから付き合っているが巻き込まれそうになったら逃げるとしようか。

強引にキャロを連れてきてしまったのでその責任くらいは取るとしよう。

マフラーに抱き締めながら眠っているキャロを見ながら部屋に戻った。

続かない

s t s 前まで (後書き)

まあ、ボツだったやつです

せつかくなので載せてみました

だから続かない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4016u/>

というアニメ

2011年7月14日09時04分発行